

ウェールズ再発見  
(その 4)  
ウェールズの伝説とトマス・ラヴ・ピーコックの『エルフィンの災難』

Wales Rediscovered  
- Part 4 -  
Welsh Legends and Thomas Love Peacock's *The Misfortunes of Elphin*

吉賀 憲 夫  
Yoshiga, Norio

**Abstract** Thomas Love Peacock wrote an Arthurian novel, *The Misfortunes of Elphin*, in 1829 adapting three classical Welsh legends, "Cantre'r Gwaelod" or "The Drowning of the Bottom Hundred", *Hanes Taliesin* or *The Story of Taliesin* and *Vita Gildae* or *The Life of Gildas*. He modified the story of "Cantre'r Gwaelod" for the opening part of the novel. We can meet there Prince Seithenyn, one of the three immortal drunkards of the isle of Britain, who says "There is nothing so dangerous as innovation," and actually does nothing.

Peacock adapted *Hanes Taliesin* for the main plot of his novel. *Hanes Taliesin* is the story of a famous Welsh bard, Taliesin, who liberates his master Elphin captured by King Maelgon. Taliesin in the novel, however, does not try to liberate Elphin by himself but comes to King Arthur's court, Caer Lleon, in order to ask for his help. The episode of the abduction of Queen Gwenyvar (Guinevere) by King Melvas and her liberation in *Vita Gildae* is used for the concluding part of the novel as a double plot of Elphin's imprisonment and his liberation. Because of the adapted episode, *The Misfortunes of Elphin* became an Arthurian novel with Welsh background. Peacock successfully could create a very interesting Arthurian legend with a strong Welsh flavour.

1

トマス・ラヴ・ピーコック (Thomas Love Peacock, 1785 - 1866) は、ロンドンのガラス商の息子として 1785 年、ウェイマス生まれた。1809 年 6 月から 1811 年 4 月まで 2 年にわたり、ウェールズ旅行をしている。1812 年に詩人のシェリーに会い、その後も交際を続け、シェリーの死後は、遺言執行人となった。1813 年春には再びウェールズを訪れ、夏にロンドンに戻っている。1816 年、初めての小

説で、ウェールズを舞台にした『ヘッドロングホール』(*Headlong Hall*) を出版した。1819 年、東インド会社に高給で迎えらる。最初は年俸 800 ポンド、後には 2,500 ポンドと年金が与えられた。1829 年、彼は『エルフィンの災難』(*The Misfortunes of Elphin*) という一種の「歴史」小説を出版した。

この『エルフィンの災難』は、6 世紀ウェールズを舞台とする小説である。6 世紀ウェールズといえどももちろんアーサー王であり、この小説にもベイドンヒル (バドニクスの丘) の戦いから凱旋して間もないアーサー王が登場する。ベイドンヒルの包囲戦

を史実とし、緒家の説に従うなら、それは5世紀末から6世紀初頭、もしくは516-18年のどちらかとなる。<sup>1)</sup> 読者はこの作品により、ウェールズを舞台とした、一味違ったアーサー王物語に遭遇することになる。そこでは、ウェールズの伝説『グワイロッドの百戸村』、『タリエシン物語』、そして『ギルダス伝』の3つが互いに絡まりあい、独特のアーサー王物語となっている。本稿では、『エルフィン of 災難』のストーリーを追いながら、その面白みを探るとともに、そこでウェールズの伝説や物語、またアーサー王伝説等がどのように扱われているかを考察することにする。

## 2

『エルフィン of 災難』という小説は、ケレディギオン(Ceredigion)国王グウィズノ・ガランヒル(Gwyddno Garanhir)の王子で、北ウェールズの王マイルゴン・グウィネズ(Maelgon Gwyneth)に幽閉されてたエルフィン(Elphin)が、詩人タリエシン(Taliesin)とアーサー王の力で解放されるという物語である。この小説の第1章から5章までは、アーサー王の父イシル・ペンドラゴン(Uther Pendragon)がブリテンの名目上の宗主であったころ、ケレディギオン国王グウィズノが堤防管理官として任命した大酒飲みサイセニン(Seithenyn)の管理する堤防が決壊し、貴重な土地が海没したという「グワイロッドの百戸村」(Cantre' Gwaelod)の伝説を素材としている。まずその伝説から紹介する。

むかし、ウェールズ西部海岸沖、今のカーディガン湾のアバドヴェイ(Aberdovey)のあたりに、海面よりも低い、大変豊かな平野があったという。その豊穡の土地には多くの人びとが住み、農業により、多くの富を生み出していた。しかし低地ゆえに、この地域は常に海の侵食を受けていた。特に高潮や大嵐による被害は大きかった。そのような自然の力からこの貴重な土地を守るため、堤防が築かれ、国王グウィズノ・ガランヒルは、高官サイセニンをその堤防管理のために任命した。その堤防には、海の変化をいち早く察知するための望楼が2つ設けてあった。それぞれの望楼には、それぞれ管理者が置かれた。

ある日、王は城で盛大な宴を設けた。サイセニンは望楼に監視員を残し、宴会へと赴いた。宴も進み、出席者はみな酔いつぶれてしまった。望楼に残された2人の監視員は交代要員が来ないので不安になり、2人の監視員のうちの1人グウィン・アップ・サルルフ(Gwyn ap Llywarch)は、もう1人を、いったい何が起きたのかを調べさすために城に向かわせた。

数時間後、天候は一変して、嵐がやって来た。しかし誰も戻って来ない。彼は危険を知らせるため、望楼の鐘を力の限り打ち鳴らした。だが、やはり誰もやって来なかった。

急を知らせるため、彼は馬に乗り、城へと急いだ。大広間に入ると、そこでは全員が酔っ払い、泥酔していた。サイセニンもそうであった。彼はサイセニンを起こそうとしたが所詮、無駄であった。そのとき彼は、王の娘がいないのに気づいた。彼は階上の王女の部屋に駆けつけ、彼女を連れ、馬に乗り、高台へと逃れた。2人はその土地が海に飲み込まれるのを見た。生き残ったものは、誰一人としていなかった。その後、二人は結婚し、かつてグワイロッドの百戸村のあった湾の海岸で暮らしたという。

これがその伝説であるが、海の穏やかな日、その海岸に立ち、耳を傾けると、望楼に設置してあった危険を知らせる鐘が鳴るのが、海中より聞こえるという。この言い伝えは「アバドヴェイの鐘」(Clychau Aberdyfi)というウェールズ民謡となった。そして今、その鐘の音は、恋人たちにだけに聞こえるという。それは次のように始まる。

Os wyt ti yn bur i mi  
Fel rwyf fi yn bur i ti  
Mal un, dau, tri, pedwar, pump, chwech  
Meddai clychau Aberdyfi.  
Un, dau, tri, pedwar, pump, chwech, saitha  
Mal un, dau tri, pedwar, pump, chwech  
Meddai clychau Aberdyfi.  
(Clychau Aberdyfi)<sup>2)</sup>

僕が君にそうであるように  
恋人よ、君が僕に誠実であるなら  
僕たちは聞かだろう、1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、  
アバドヴェイの鐘の音を

聞こえる、1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ、7つ  
ほら、聞こえる、1つ、2つ、3つ、4つ、5つ、6つ  
アバドヴェイの鐘の音が。

「アバドヴェイの鐘」

この伝説の面白いところは、その土地の喪失が、人間の知恵や力を越えた自然の猛威によることもさることながら、実は人災であり、それも大酒を飲んだ結果であるという、非常に人間的な、また滑稽な過失に起因するものであるというところにある。堤防管理官のサイセニンは、ウェールズに残る三題詩(トライアド)の1つ「ブリテン三大酔っ払い」の1人に数えられているが、ピーコックは、その彼を小説の中でシェイクスピアの創り出したあの愉快なフォルスタフに肉薄するほどの人物に仕上げている。<sup>3)</sup>

国王は堤防の管理をサイセニンに任せ、彼は部下にそれを任じた。その部下は、さらにその部下に任じ、その部下は堤防をなすがままに任じた。その結果、その堤防は大変危険な状態になっていた。ある日、望楼の監視員タイスリン・アップ・タスラル(Teithrin ap Tathral)は、自分の管轄区域以外の堤防が非常に老朽化し、危険な状態にあるということに偶然気づいた。彼は、そのことをサイセニンに報告しようとしたが、まともにとりあってくれない。そこで、国王に直訴するために、宮殿へ行った。ところが、国王は詩作の最中で、タイスリンは邪魔しないほうが賢明であると考えた。幸運にも、彼は王子エルフィンに会うことができ、事の重大さを訴える。エルフィンが彼を伴い、急ぎサイセニンの城に駆けつけた。しかしサイセニンは既に酩酊しており、2人が4人に見えるありさまであった。しかも王子と聞いて立ち上がろうとするが、直立できぬまま、椅子に崩れ落ちるように座ってしまった。王子は堤防の老朽化とその危険性についてサイセニンを責めたが、その老朽化に関するサイセニンの反論がすこぶ面白い。

エルフィンが、堤防は危険なほど老朽化していると言うと、守旧派の権化のようなサイセニンはこう答える。

“Decay,” said Seithenyn, “is one thing, and danger is

another. Every thing that is old must decay. That the embankment is old, I am free to confess; that it is somewhat rotten in parts, I will not altogether deny; that it is any the worse for that, I do most sturdily gainsay. It does its business well: it works well: it keeps out the water from the land, and it lets in the wine upon the High Commission of Embankment. Cupbearer, fill. Our ancestors were wiser than we: they built it in their wisdom; and, if we should be so rash as to try to mend it, we should only mar it.”

(*The Misfortunes of Elphin*, p. 15.)

石組みは壊れ、抉られている部分もあり、杭は腐り、抜けている部分もある。防潮門や水門は水漏れがし、がたがたになっている、という非難に対し、彼は次のように答える。

“That is the beauty of it,” said Seithenyn. “Some parts of it are rotten, and some parts of it are sound . . . But I say, that parts that are rotten give elasticity to those that are sound: they give them elasticity, elasticity, elasticity. If it were all sound, it would break by its own obstinate stiffness: the soundness is checked by the rottenness, and the stiffness is balanced by the elasticity. There is nothing so dangerous as innovation.”

(*The Misfortunes of Elphin*, p. 15-16.)

ここで繰り返されているサイセニンの屁理屈は「革新ほど危険なものはない」という驚くべき結論に辿り着く。読者はあきれかえりながらも、知らず知らずのうちに納得させられてしまう。堤防の美学まで持ち出しているのは、当時流行っていたピクチャレスクという美的概念への風刺であろうが、「革新ほど危険なものはない」という言葉は、改革主義者で、首相となったジョージ・キャンニング(George Canning)への風刺であったという。<sup>4)</sup>

望楼の倒壊する音でサイセニンは目を覚ます。堤防に襲いかかる壁のような波を見て、「誰の仕業だ、姿を現せ」と叫び、彼は剣を振り回し、渦巻く海水の中に飛び込み、海の中に飲み込まれていった。エルフィン、サイセニンの娘アンガラッド、タイスリン、吟唱詩人、侍女は洪水を逃れ、国王の宮殿へと

逃れる。グワイロッドの惨状を知った国王グウィズノは、イシル・ペンドラゴンやその他の国王に援助を求めため、タイスリンとその吟唱詩人を派遣した。その結果、グウィズノに多くの援助がもたらされた。その中で、もっとも貴重なものは、魔術師マーリンから贈られた大籠であった。その大籠は、夜その中に入れたものが一晩のうちに100倍になるというものであった。

実はこの大籠は、アーサー王物語群の中で最古の『キルフフとオルウエン』(*Culhwch ac Olwen*)に出てくる食物の尽きることのない籠のことであり、巨人アスバザデン(*Ysbaddaden*)がそれを奪うようとキルフフに課した難題の1つであった。巨人アスバザデンはキルフフに次のように言う。

「それはできるとしても、手に入れられぬものがあるぞ。長脛のグウィズネの大籠よ。全世界の人々がそのまわりを囲み、一度に九の三倍の者がそれぞれ好みに従って食べ物を求めたとしても、その籠の中には十分にまかなえるだけのものが入っているという。娘がおまえといっしょに眠る晩、わしはその籠の中から食事をとらねばならぬ。やつは、だれにもみずから進んでそれをやろうとはせぬし、むりにそうさせるわけにもゆくまい」<sup>9)</sup>

(中野節子訳『マビノギオン』、p.185.)

大籠の由来を、ピーコックは国土の海没にたいする援助としてマーリンが与えたとしているが、もちろんこれは、彼の創作である。しかしこの魔法の大籠を、大災害に対する食料援助として与えたという考え方は、さすが東インド会社のエリート社員ピーコックならではの発想なのかもしれない。

『マビノギオン』の世界、言い換えればケルト人の世界では、3は神聖な数であり、従って「九の三倍」というような3を単位とする神秘的な表現が使われるが、ピーコックにおいては100倍という、いとも単純な倍率が採用されている。このような数の問題は、この小説の別の場所で、アーサーがペイドンヒルで殺したサクソン人の数をピーコックが440にしていることにも表れている。ネンニウスの『ブリトン人史』(*Historia Brittonum*)第56章では、アーサーは1人で1日に960人を殺した、とあ

る。<sup>9)</sup> この良く知られている数を、ピーコックは440に変更しているのである。3の倍数を無意味として、意識的に避けただけの話なのであろうか。それとも単に音の響きの問題であったのか、その理由は不明である。

## 3

第5章で導入部としての「グワイロッドの百戸村」の伝説の役目は終わり、物語は詩人タリエシンにまつわる『タリエシン物語』(*Hanes Taliesin*)のストーリーに沿って進み、新しい展開を見せる。タリエシンは6世紀後半に北部イングランド地方に住んだとされる吟唱詩人である。『タリエシンの書』(*Llyfr Taliesin*)は、彼の詩を集めたものされてきたが、彼自身の書いた詩は、12編ぐらいであるという。彼は詩人、予言者、賢者として歴史の中に定着する。

彼はまたウェールズの伝説の中にも生きている。『キルフフとオルウエン』には、吟唱詩人の長として、タリエシンの名が出てくる。また、『マビノギオン』の第2の物語『スイールの娘ブランウエン』(*Branwen ferch Lyr*)では、彼はイウェルゾン(アイランド)のマソルッフ(*Matholwch*)王との戦いで生き残った7人のうちの1人である。

「こんなふうにして、強者の島の人々は、かろうじて勝利を手にすることができた。とはいうものの、生きて逃れてくることができた七人の男たち以外の者にとっては、とても勝利といえるようなものではなかった。ペンディゲイドブラン自身、足に毒槍の傷を受けてしまっていた。逃れ得た七人とは、プレディ、マナウィダン、タランの息子ダリヴィエ、タリエシンとイナウク、ムリエルの息子グリズイエ、そして古老グウィンの息子ヘイリンである。」

(中野節子訳『マビノギオン』、p.71-72.)

さて、『タリエシン物語』に戻ろう。魔女ケリドウェン(*Ceridwen*)の所有する「知識と靈感の大釜」の中の液体3滴を飲んでしまった召使グウィオン・バーハ(*Gwion Bach*)は、この世の全ての知識を得、また詩を作る能力と予言の能力を得て、その場から

逃亡する。ケリドウェンは必死に彼を追う。彼女から逃れるため、グウィオン・バーハは姿を何度も変えた。ついに彼が麦粒に変身したとき、ケリドウェンは雌鶏に姿を変え、その麦粒を啄み、飲み込んでしまった。その後、彼女は妊娠し、子がグウィオンであることを知る。その子を産んだとき、即座に殺そうとしたが、あまりのかわいらしさにそれを思いとどまり、その子を皮袋に入れ、海に流す。その皮袋はエルフィン王子の鮭を捕る堰に漂着する。「運の悪い男」として評判のエルフィンは、鮭の代わりに、その幼児を見つけてしまう。エルフィンは、そのかわいさに、その子をタリエシンと名づけ、育てる。

時は移り、エルフィンは叔父にあたるグウィネズ王マイルゴンがディガニューイ城で行うクリスマスの祝いに招かれる。そこに集まった騎士や郷士たちは王に追従して、王ほど恵まれたものはいない、その妃は美しく、優雅で、つつましく、貞節であり、國中探しても妃ほどの女性はいないし、またマイルゴンの吟唱詩人以上に博学で技巧に長けた詩人がいるだろうか、と言って王を称える。エルフィンがこれに異を唱えたことがマイルゴンに知れ、怒った彼はエルフィンを捕らえ、幽閉する。

タリエシンはエルフィンの妻が貞淑であることを証明し、次に彼がマイルゴンの詩人たちに勝ることを証明するために、詩を朗読し始める。すると、にわか嵐が起り、城が崩れそうになる。王はエルフィンを地下牢から出すように命じる。タリエシンが朗読し終えると同時に、エルフィンの足から、足かせの鎖が外れる。これが『タリエシン物語』の概要である。<sup>7)</sup> 『エルフィン of 災難』第5章最終部から第10章までは、この『タリエシン物語』を下敷きにして、物語が展開していくことになる。(なお、この小説の終章に近い、第15章のアーサー王の宮殿で行われる吟唱詩人大会において、タリエシンは自らの出生を「ケリドウェンの大釜」という詩に作り、披露することになる。<sup>8)</sup>)

小説『エルフィン of 災難』に戻る。国王グウィズノは歳入の根幹部分たる重要な国土を失ったが、なんとか宮殿を維持した。一方、エルフィンはサイセニンの娘アンガラッドと結婚した。彼はマウザッフ

川に鮭を捕るための堰を造り、漁業に励んだ。グウィズノ王は終日岩に座り、かつての国土の上に広がる海を見つめ、ハーブを奏で、悲しみの歌に心情を吐露した。このようにしてケレディギオン王国は衰亡していった。

エルフィンは大規模な漁業を展開し、国内で消費する以上の漁獲を得るようになった。ある7月の夜、アンガラッドは大漁の夢を見た。真夜中、満月のさやかな光の下、2人は堰に駆けつけると、堰の水門が開いていた。そのため堰の中の鮭はみな逃げてしまっていた。かわりに獣の皮で船体を覆ったウェールズ独特の網代舟コラクルが漂着していた。そのコラクルの中には、立派な布に包まれた幼児が眠っていた。アンガラッドがその子を抱くと、その子は微笑み、手を差し伸べた。彼女はそのかわいらしさに心を打たれ、「輝く額」という意味の「タリエシン」という言葉を声に発した。それが次の部分である。

In the coracle lay a sleeping child, clothed in splendid apparel. Angharad took it in her arms. The child opened its eyes, and stretched its little arms towards her with a smile; and she uttered in delight and wonder at its surpassing beauty, the exclamation of "Taliesin!" "Radiant brow!"

(*The Misfortunes of Elphin*, p. 47.)

面白いことに、このくだりは、先に述べた第15章のタリエシンが、自らの出生と生い立ちを吟唱詩人大会で歌った以下の部分と若干食い違いがある。

The summer night was still and bright,  
The summer moon was large and clear,  
The frail bark, on the springtide's height,  
Was floated into Elphin's weir.  
The baby in his arms he raised:  
His lovely spouse stood by, and gazed,  
And, blessing it with gentle vow,  
Cried "TALIESIN!" "Radiant brow!"

(*The Misfortunes of Elphin*, p. 143.)

このタリエシンの詩では、幼児のタリエシンを抱き上げたのはエルフィンであるが、先に挙げた引用

箇所ではアンガラッドが抱き上げたことになっている。

タリエシンは、エルフィンとアンガラッドにより養育されるが、彼に教育を施したのは国王グウィズノであった。王はその時代の全ての知識をタリエシンに授けた。それは、道徳、政治学、医学、物理、法律、宗教といったあらゆる分野に及んだ。タリエシンはスノードンを彷徨い、自然との交流を深め、ついには吟唱詩人となる。

やがて、王グウィズノは死に、エルフィンが王となった。イシル・ペンドラゴンも死に、アーサーがカイルレオンで、ブリテンの諸王を束ねる王となった。ケレディギオンに国境を接する北ウェールズの王に、マイルゴン・グウィネズがいた。(歴史上の彼は6世紀前半にグウィネズ国を治めていたが、ギルダスの『ブリタニアの破滅について』(DE excido Brinanniae)の中で、その生活態度を厳しく非難された人物であった。)

彼は狩りが好きで、ある日、鹿を追っていると、偶然エルフィンの住居を見つけ、冬に備えて貯えてあった食料を飲み食いしてしまった。そこにエルフィンとタリエシンが戻って来る。マイルゴンは無礼を詫び、エルフィンを彼の居城ディガヌイ城へと招く。マイルゴンは自分の武勇と自分の吟唱詩人を自慢し、なかならず、自分の妻が一番美しく、貞淑であることを誇る。当惑したエルフィンは、彼の武勇と吟唱詩人に関しては同意したが、一番美しく、貞淑であるのは自分の妻であると反論する。

この話を聞いたマイルゴンの邪悪な息子リーン(Prince Rhun)は、翌朝アンガラッドを誘惑するためにエルフィンの住居に行くが、彼の意図を見破ったタリエシンは、彼女の侍女を身代わりに立てる。リーンは身代わりの侍女と一夜を過ごす。勝ち誇ったリーンは、彼女の不貞の証拠として、切り取った侍女の髪の毛と指輪を持ち帰った。(『タリエシン物語』では、リーンが持ち帰ったものは、彼が残忍に切り取った、身代わりの侍女の小指であった。また、その切り取られた小指には、エルフィンの指輪がついていた。)マイルゴンは息子の手柄に狂喜し、エルフィンの前にその証拠の品を並べるが、エルフィンは即座にこれが偽物であることを見抜き、彼は言を翻さなかった。激怒したマイルゴンはエルフィン

を地下牢に幽閉してしまう。

父親を幽閉されてしまった娘メランゲル(Melanghel)は、タリエシンに父親の救出を願う。彼は彼女の愛を得るために立ち上がる。ここから『エルフィンの災難』は、愛する女性の愛を得るための冒険というアーサー王的主題を帯びてくる。タリエシンはマイルゴンの城の大広間に現れ、詩を吟じる。王はタリエシンが王の吟唱詩人に勝ることを認める。しかし、息子リーンがアンガラッドから切り取った髪の毛と指輪という不貞の証拠があるにもかかわらず、エルフィンが妻の不貞を認めないゆえ、認めるまで彼を捕らえておくと言う。タリエシンは、リーンの受けた「好意」はアンガラッドの侍女のものであったと真実を伝え、アンガラッドを賞賛する。リーンは再度アンガラッドを誘惑することを決意する。マイルゴンは怒り、最後の審判の日まで彼を幽閉すると言う。

これに対し、タリエシンはハーブを手に取り、詩を吟じ、アーサー王の力を借り、マイルゴンの城を攻めると告げる。しかし、マイルゴンは、アーサー王は略奪者により連れ去られた妃を捜すことや、サクソン人との戦いで手一杯であり、そのようなことは無駄であると嘯く。そして本来なら、タリエシンを捕らえ、地下牢のエルフィンの元に送るのだが、吟唱詩人の特権を尊重し、この城から立ち去ることを許す、と言う。

この時点で、マイルゴンは、行方不明のアーサー王妃に言及しているが、『タリエシン物語』ではこの話は出てこない。これは、この小説を構成する第3番目の物語『ギルダス伝』のエピソードであり、第11章以降への橋渡しの役割を果たすことになる。

一方、マイルゴンの息子リーンは騙されたことに怒り、再度エルフィンの妻アンガラッドを捕らえようとするが、逆に洞窟へと誘い込まれる。すると、洞窟の入り口は目に見えない不思議な力により、巨大な岩で閉ざされ、彼は閉じ込められてしまう。エルフィンだけがこの岩を取り除くことができるというタイスリン・アップ・タスラルのしわがれた声が外から響く。

4

さて、ここからのストーリー、すなわち第 11 章から終章 16 章までは、12 世紀前半のウェールズのサンカルヴァン修道院のカラドックの手になるといわれる『ギルダス伝』(Vita Gildae)のエピソードに沿って展開する。『ギルダス伝』によれば、アーサー王妃はサマセットの王メルワス(Melwas)に誘拐され、1 年間監禁された。アーサー王は彼女がグラストンベリに捕らられていることを知り、すぐさま、デヴォンとコーンウォールから兵を集め、グラストンベリを包囲する。ギルダスとグラストンベリ修道院長がメルワスを説得し、妃はアーサー王のもとに返される。<sup>9)</sup> (またクレティアン・ド・トロワはこの題材をランスロットと結びつけたという。) 以上がこの小説に取り込まれた『ギルダス伝』のエピソードである。

このメルワスはウェールズ名であり、一般には騎士メレアガンス(Meleagaunce)として知られる。彼はバグデマガス王の息子で、アーサー王妃グウィネヴィアを誘拐し、国に連れ帰り、乱暴しようとしたが、親に諫められ、それを思いとどまる。この先は、いろいろな話があり、例えばランスロットが登場し、彼女を救出するという話もある。ウェールズでは、先に述べた『ギルダス伝』の中の伝説となっている。

タリエシンはカイルレオンのアーサー王の宮殿に急ぐ。その間、彼は多くの王の歓待を受けたが、中でもトウィー川のほとりにあるディナス・ヴァウル(Dinas Vawr)城では特に歓迎された。その城には、メルヴァス王(King Melvas)と守備隊が駐屯していた。そこで彼は 1 人の太った、赤ら顔の、バッカス神のような老人に会った。その老人こそ、20 年前に海の底に沈み、死んだと思われていたサイセニンであった。タリエシンは、にわかには信じる事ができなかった。しかしサイセニンは、死んでいない「理屈」を次のように説明する。

“They have not made it know to me,” said Seithenyn, “for the best of all reasons, that one can only know the truth ; for, if that which we think we know is not truth, it

is something which we do not know. A man cannot know his own death ; for, while he knows nay thing, he is alive ; at least, I never heard of a dead man who knew any thing, or pretended to know any thing: if he had so pretended, I should have told him to his face he was no dead man.”

(*The Misfortunes of Elphin*, p.94.)

この個所も、ピーコックの筆の冴えが見られる場所である。この理屈を聞き、タリエシンは

“Your mode of reasoning,” said Taliesin, “unquestionably corresponds with what I have heard of Seithenyn’s : but how is it possible Seithenyn can be living?”

(*The Misfortunes of Elphin*, p.94.)

と言い、彼がサイセニンであると納得する。サイセニンは酔いつぶれる前に、この城にはブリテン島で一番の美女がいるとタリエシンに伝える。

“... I can tell you what,” he added, in a very low voice, cocking his eye, and putting his finger on his lips, “he (King Melvas) has got in this very castle the finest woman in Britain.”

(*The Misfortunes of Elphin*, p. 97.)

『エルフィン』第 12 章のタイトルは「壮麗なるカイルレオン」である。アーサー王の宮廷が、一体何処であったのかというのは、古来議論されてきたところである。候補地としては、イングランドのカドベリー・カースル、ウィンチェスター、南ウェールズのカイルレオンまたはカイルウエントの名前が上がっている。この小説においては、アーサー王はアスク川のほとりのカイルレオン(Caerleon)に宮廷を置いている。ピーコックは *Caer Lleon* と綴っているが、*Caerleon* が現在の綴りである。このカイルレオンとは、その昔、ローマ軍がウェールズを封じ込めるために軍団司令部の要塞を築いた場所であり、その名は「カイル」(要塞)と「レオン(レギオン)」(軍団)が結合された「軍団の要塞」を意味する。事実ここには、第 2 アウグストゥス軍団が駐

屯した。

タリエシンはクリスマスを迎えようとしているカイルレオンにやって来る。彼は吟唱詩人の特権でアーサー王の宮殿に入る。アーサー王はペイドン（バドニクス）の丘の包囲戦で大勝利を収め凱旋し、勝利の宴をおこなっていたが、一方、彼の妃は行方不明のままであった。タリエシンはアーサー王の前に進み出て、王妃グウェンイヴァル(Gwenyvar)がメルヴァス王に捕らえられていることを伝える。アーサー王は宴を中止し、ディナス・ヴァウル城攻略の準備を命じる。しかし、進軍が始まる直前に、メルヴァス王がセヴァーン川を越え、沼沢地に城壁を廻らしたアヴァロンの島に移動したとの情報が入る。王はしかたなく、クリスマスのカイルレオンで祝うことにした。

タリエシンはカイルレオンから姿を消した。彼はアーサー王の妃を解放しない限りエルフィンが解放されないことを知っていたし、また妃の解放は平和的に行わなければならないことも知っていた。そこで彼は小舟に乗り、アヴァロンに向かう。アヴァロンの修道院は、のち、グラストンベリと呼ばれるようになるが、その隣にはメルヴァス王の城があり、修道院はメルヴァスの庇護の下にあった。タリエシンは修道院長に会うが、そこにはサイセニンがいた。会談の結論は、サクソン人を迎え撃たなければならない今、女性のことでブリトン人が仲たがいでいるときではなく、修道院長は、その宗教的影響力を駆使し、妃を解放させ、サクソン人との戦に備えるようにメルヴァス王を説得する、ということになった。

メルヴァス王は自分の武力がアーサー王に及ばないことを知っていた。そこで、ブリテンで最も美しいというアーサーの妃を自分のものとするにより、満足を得ようとした。そこで、アーサー王が留守のときに、森に狩りに出た妃を捕らえ、連れ去ったのであった。メルヴァス王と会談する修道院長はグウェンイヴァルが第2のトロイのヘレンになることを恐れると告げる。議論の末、メルヴァス王は彼の情熱をサクソン人の打倒に向け、王妃をカイルレオンに戻すことを誓う。

カイルレオンでは吟唱詩人大会が催され、タリエシンは自らの出生と生い立ちの詩を披露する。それ

は今では『タリエシン物語』(*Hanes Taliesin*)として知られているものであった。しかし、この小説では、『ケリドウェンの大釜』というタイトルがつけられ、タリエシンの出生とエルフィンに発見されるにいたる経緯が簡潔に語られる。そして最後に、マイルゴンに対し、正義を行うことを要求する言葉で彼は詩を終える。

アヴァロンの修道院長とサイセニンに伴われ、解放された王妃グウェンイヴァルが宮廷へと戻って来た。サイセニンは王妃グウェンイヴァルが連れ去られたときそのまま、汚されることなく帰還したことをアーサー王に確約する。モルドレッドの妻で、グウェンイヴァルの妹であるグウェンヴァハ(Gwenvach)は「ここにいる誰がそれを疑いましょうか」と言ったが、グウェンイヴァルはそれが気に食わず、アーサー王に帰還の挨拶する前に妹に振り向き、彼女の頬を平手打ちしてしまう。これが「ブリテン島の不幸な3つの平手打ち」の1つとして三題詩(トライアド)に記録されている。すなわちこの不幸な事件が、アーサー王とモルドレッドの反目の原因となり、カムランの戦いへと続く原因となるのである。

三題詩とは、詩人の覚書のような短い詩で、人物や出来事を3つ、または3行に収めたものである。例として、この小説の第9章の冒頭に掲げられている三題詩挙げる。

Three things that will always swallow, and never be satisfied: the sea; a burial ground; and a king.

(*The Misfortunes of Elphin*, p.74.)

確かに、大変気が利いていて、覚えやすい様式の詩である。(これと同じようなものが日本にもある。「三成に / 過ぎたるものが / 二つある / 島の左近と、 / 佐和山の城」<sup>10)</sup> というように、武家の特徴を短く言い表した表現で、大変覚えやすい。

ちなみに、他の2つとは、まず、ブランウェンへの平手打ちであった。それは『スウィールの娘ブランウェン』に書かれている。アイルランド王に嫁いだブランウェンは、その王がウェールズで受けた屈辱の報復として、王の寝室から追い出され、宮廷の厨房で働かされた。そのうえ彼女は、肉を刻み終わった肉屋に、毎日その頬を平手で打たれた。<sup>11)</sup> その



平手打ちの報復として、アイルランドに軍隊が差し向けられ、悲惨な戦となった。3 番目は、聖カドワラドル(St Cadwaladr)に対するコレザン・ヴァルス(Golyddan Fardd)といわれている。<sup>12)</sup>

サイセニンはタリエシンの功績を述べ、アーサー王は彼に感謝の意を表すとともに、タリエシンの詩からマイルゴンの罪を知り、いかなる正義を望むかと問う。彼はエルフィンの幽閉について語り、アーサー王は彼の解放を誓う。するとそこに突然マイルゴンが現れ、息子リーン王子が行方不明となり、懸命の探索のかいもなく、最後の手段として、タリエシンを追い、カイルレオンにやって来た旨を告げる。アーサー王はマイルゴンに、息子は無事である、エルフィンが解放された暁には、息子も解放されるであろう、と告げる。マイルゴンはアーサー王の命令に従い、エルフィンを解放し、エルフィンはリーンを解放する。

エルフィン解放の任にあたった騎士カラドックは、後日エルフィンとその妻アンガラッドと娘メランゲルを連れ、アーサー王の宮殿に現れる。アーサーはタリエシンの功績に対し、宮廷の美女の1人を彼の妻とせよ、その女に持参金をつけようと申し出るが、タリエシンはメランゲルを妻としたいと言う。エルフィンは即座に快諾する。アーサーはマイルゴンにその結婚費用を支払うように命じる。サイセニンは空席となっていたアーサー王の副酒蔵頭に就任し、タリエシンは吟唱詩人大会で吟唱詩人の長に選ばれる。ケレディギオン王国は、アーサー王の庇護の下、繁栄し、その繁栄のさなかにタリエシンとメランゲルの息子に引き継がれた。以上が『エルフィンの災難』の物語である。

## 5

19 世紀におけるアーサー王伝説の復活は、1816 年のサー・トマス・マロリー(Sir Thomas Malory, d.1471) の『アーサー王の死』(*Le Morte Darthur*) が復刻されたことに端を発する。そしてそれはテニスン(Tennyson, 1809-1892)の『国王牧歌』(*The Idylls of the King*)でブームの頂点を迎える。当初のアーサー王伝説の復活は、必然的にその伝説の背後にある「ブリテン」的なものへの興味に裏打ちされていた。しかし、やがてその伝説はヴィクトリア朝のイデオロ

ギーの中で、その社会と文化を反映しながら、変容し、受容されていった。

1829 年に出版されたピーコックの『エルフィンの災難』は、「ブリテン」的なアーサー王伝説の系譜に属するであろうが、そこで展開されている物語は、主としてウェールズの伝説に基づく中世ウェールズの冒険談である。そこでのアーサー王はどちらかと言えば、脇役に過ぎず、大酒飲みサイセニンやタリエシンが主役を演じ、精彩を放っている。その他の悪役も負けてはいない。キリスト教的な宗教色もほとんど見当たらず、読者は6世紀のウェールズに迷い込んだ感すらある。円卓の騎士の列挙は、その好例である。

...Gwalchmai ap Gwyar the Courteous, the nephew of Arthur; Caradoc, "Colofn Cymry," the Pillar of Cambria, whose lady, as above noticed, was the mirror of chastity; and Trystan ap Tallwch, the lover of the beautiful Essyllt, the daughter, or, according to some, the wife, of his uncle March ap Meirchion; persons known to all the world, as Sir Gawain, Sir Craddock, and Sir Tristram.

(*The Misfortunes of Elphin*, p108.)

『エルフィンの災難』は、20 歳代に長期、短期を含め2度ウェールズを旅し、ウェールズの伝説、文学、歴史に造詣を深め、ウェールズを愛したピーコックならではの作品といえる。

## 注

1. 青山吉信、『アーサー王伝説』(岩波書店、1985), p. 81.
2. <http://www.contemplator.com/tunebook/wlshmidi/aberdovy.htm>
3. "It is there (*The Misfortunes of Elphin*) we meet Prince Seithenyn, the best comic toper outside Shakespeare, and a master of strangely fuddled logic. What an astonishing speech is that in which he defends his policy of doing nothing to the embankment in his charge!" J. B. Priestley, *English Humour* (London, 1929), p. 88.
4. David Mckie, "In Praise of Disputation, and Drink, Peacock got his priorities just right. We should celebrate

him", Thursday April 19, 2001, *The Guardian*,

<http://www.guardian.co.uk/Columnists/Column/0,5673,474834,00.html>

5. ここでいうグウィズネ (Gwyddneu) とはグウィズノ (Gwyddno) のことである。
6. Nennius, *Historia Brittonum*, "The twelfth battle was on Mount Badon in which there fell in one day 960 men from one charge by Arthur; and no one struck them down except Arthur himself, and in all the wars he emerged as victor.",  
<http://www.lib.rochester.edu/camelot/nennius.htm>
7. <http://freespace.virgin.net/ken.collinson/12taliesin.html>. <http://www.cyberphile.co.uk/~taff/taffnet/mabinogion/taliesin.html>
8. *The Misfortunes of Elphin*, p.142-144.
9. リチャード・キャヴェンディッシュ (高市順一郎訳)、『アーサー王伝説』(晶文社、1983)、p. 41, ローナン・コグラン (山本史郎訳)、『図説アーサー王事典』(原書房、1996)、p. 262 - 263.
10. 司馬遼太郎、『関ヶ原・上巻』(新潮文庫、昭和49年)、p. 20.
11. 中野節子訳、『マビノギオン・中世ウェールズ幻想物語集』(JLUA、2000)、p. 63.
12. *Ibid.*, p. 421

テキスト

Thomas Love Peacock, *The Misfortunes of Elphin* (*The Works of Thomas Love Peacock*, vol.4, AMS Press INC, 1967)

参考書目

- ベルンハルト・マイヤー(鶴岡真弓監修、平島直一郎訳)、『ケルト辞典』(創元社、2001)
- ローナン・コグラン(山本史郎訳)、『図説アーサー王事典』(原書房、1996)
- 中野節子訳、『マビノギオン・中世ウェールズ幻想物語集』(JLUA、2000)
- リチャード・キャヴェンディッシュ (高市順一郎訳)、『アーサー王伝説』(晶文社、1983)
- T.E.ピーコック (梅宮創造訳)、『夢魔邸』(旺史社、1989)
- Taliesin*, Translation by Lady Charlotte Guest, <http://freespace.virgin.net/ken.collinson/12taliesin.html>
- Cantre'r Gwaelod*, <http://www.lcars.eu.org/r.cadwaladr/Cantre.htm#top>
- The Drowning of the Bottom Hundred*, <http://sacred-texts.com/neu/celt/wfb/wfb05.htm>
- 不破有理、「ヴィクトリア朝の受難者・アーサーの息子モードレッド」、『ユリイカ』(青土社、1991年、vol.23,10)

(受理 平成14年3月19日)